

佳作

## テーマ：誰かのために、わたしができること 「橋」

岐阜県立吉城高等学校3年 鮫嶋優衣

「理学療法士になる」、これが私の夢。きっかけをくれたのは難聴で肢体不自由の妹の存在だ。

障がいをもつ妹と生活する中で、人との関わり、健常者と障がい者について考える機会が多くあった。

妹のために学校に特別支援学級をつくってくれた教育委員会の方。手話を覚えてくれたり、行事で妹が出来る範囲での仕事を与えてくれる友達。簡単なりハビリを勉強してくれる担任の先生。沢山の人が陰で支えてくれたり、妹が少しでも皆と同じ生活が出来るようにしてくれている人達の存在を知った。その反面、妹と買い物に行った時の周りの人の視線で嫌な思いをしたり、友人の一人に、「こういう人、苦手」と妹のことを言われて泣いたこともあった。そういう時には、「障がい者と健常者の一体どこが違うのか」と腹立たしく思った。私の妹は、皆と同じように勉強し、テレビを見て、食事をする。健常者となにも変わらない生活をしている。ただ人より苦手なことがあったり、一人で出来ないことがあるだけだ。それなのにどうして偏見は生まれるのだろうか。

偏見の原因として、一つには障がい者のことを知らない、関わる機会が少ないことがあると考える。最近、盲導犬を傷つける人がいたり、盲目の人が使う杖につまずいたことで、目の見えない人の足を蹴る人がいたことをニュースで見したが、こういう行動をとる人も障がい者について知らなかったり、関わりがないからだと思う。障がい者を健常者の立場から見ると「あれもできない。これもできない」とマイナスの視点で捉えるのではなく、「こうすればあれもできる。これもできる」というプラスの視点で捉えることで障がい者のできる範囲を増やし、可能性を伸ばすことにつながると思う。障がい者と健常者という括り

で分けてしまうことにより、障がい者も健常者と同じようにある可能性を失ってしまっていると思った。だから、誰もが持っている可能性を充分に発揮できる社会をつくっていくことが必要だと思った。

そのような社会をつくっていくためには、まず健常者が障がい者について知ることができるよう地域で障がい者と健常者が共に理解を深める場を設けることが必要だ。障がい者のもつ可能性や、一人の人間としての存在を社会で認めることにより障がい者の活躍の場が広がると思う。次に障がい者自身が積極的に社会へ出ることを考え、自分のできることをやる。そこで困難なことがあったら健常者が手助けをする。こういう流れが共生へとつながっていく第一歩になると思う。

さらに、このような社会をつくる上で私にできることは何かを考えながら、「理学療法士」になって、身体が不自由になった人たちの身体機能の回復を図り社会復帰の手助けをしたいと思うようになった。そして、家族に障がい者をもつ者として、社会人としてこれから妹のために覚えた手話を他の聴覚障がい者との会話に生かすことや、障がい者と交流する機会があれば積極的に参加していきたい。このような行動を自分ができることによって周りの健常者にも障がい者に興味関心をもつきっかけをつくり、社会との橋渡しができたらいいと思う。

たった一人の力で社会を変えることは難しいが、たった一人でも行動を起こせば社会を変えることは可能だと思う。皆に平等に与えられた生涯を、皆が平等に送っていくにはお互いのことを知ることが必要であり、それが共に生きていく社会をつくっていくことにつながると思う。私はこれから、積極的に障がい者と関わりその理解を深めることに努めるとともに、理学療法士を目指して勉学に励み、共に生きていく社会をつくることに貢献していきたい。